

歴博 くらしの植物苑だより

第132回くらしの植物苑観察会 3月27日(土)

村絵図を持って村を歩こう

久留島 浩(国立歴史民俗博物館)

村絵図をよむ 一村絵図・地図・空中写真から想像復元する江戸時代の村の姿―

【まだ、今なら発見できる「江戸時代の村」】

みなさんは、江戸時代と言うと、どのようなイメージをお持ちでしょうか？時代劇がお好きな方（若い人のなかではすっかり不人気ですが）は、テレビなら「水戸黄門」「徳川吉宗＝暴れん坊将軍」あるいは「在りし日の中村主水」でしょうか？藤沢周平の歴史小説やそれを映画化したものでしょうか？今なら、坂本龍馬かもしれません。そのなかで、とくに映像のなかでの村の描き方は、あまりうまくありません。都市なら、それなりに時代考証をした「舞台セット」がたとえば太秦などにあるので、ある程度なんとかなりますが、村というところはいきません。「江戸村」でも実は村は関心の外のようなのです。

しかし、実際に当時の様子が結構残っているのは、村の方かもしれません。もちろん、1970年代以降村の姿はどんどん変わって（変えられて）きました。過疎の地域は別にして、ちょっとした道路が通るところでは、どこに行っても同じようなファミレスやコンビニが並びます。それでも、かつての村の中を歩き回ると何か近世の「痕跡」を発見することができます（かつての家はなくなって、櫛の歯がぬけるようになっているけれど開発もそれほど進んでいない佐倉のような中小城下町でも同じですが）。近世の村絵図などいくつかの調査セットを持って歩き回ると、意外なところで「江戸時代」を実感することができます。

そこで、今回は、村絵図から江戸時代の村を想像復元する「こつ」についてお話ししましょう。最初は、村絵図に描かれた植物の話と言われたのですが、いかんせん松と杉のちがいがいまいしかわからないわたしですので、村絵図をよむ楽しみについてお話することで責に替えたいと思います。

【描かれた「村の自画像」としての村絵図】

荘園などの絵図のなかに「集落」が描かれることはありましたが、各村の絵図が作成されるようになるのは江戸時代になってからです。ただ、一口に村絵図と言っても、作成された目的によって、描かれる内容は異なります。また、大切にされている絵図は、境争論に関わる、言わば村の権利をまもる根拠となるような絵図です。ここでは、領主や代官が替わるときに、村から新しい領主・代官に提出された、あるいは将軍の代替わりのときに全国に派遣された巡見使に提出された村絵図をとりあげることになります。村自らが描いた言わば「自画像」だからです。

【村絵図に描かれるもの】

19世紀のものと思われる下総国千葉郡平川村の村絵図から、描かれているものを整理してみましょう。人々の生活に関わるものとして家や小集落（小名集落）、宗教・習俗的な施設として寺・神社・墓地、生産に関わるものとして田・畑・野（内野と入会野）・山・林・川、村の公共的施設として高札場・郷蔵、村の位置を示すもの

として方角・村境・道（隣村へつながる道）が描かれています。さらに、この村境の一部は上総国と下総国の境でもあるので、国境の標識（ここでは松）が描かれています。植物ではっきりそれとわかるように描かれているのは、このような境界の標識になっている木であることが多く、ここでは、「国境の松」だけでなく「国境並木」（松）も描き込まれています。ちなみに、ここには明記されてはいませんが、明治期の地図によれば松と柵の林がところどころにあったようです。

【村の復元】

村の真ん中を南から北にかけて水田が連なっています。川（鹿島川）沿いに谷があり、言わばヤツ田が広がるのです。このヤツ田をはさんで西側に「新田」という小名集落が、南西側（ほぼ中央で、高札場があるあたり）に「本郷」が、ヤツ田をはさんで反対側に「向」^{むかい}が、さらに家の数は少ないのですが「本郷」の南側に「金糞」^{かなくそ}がそれぞれあります。「新田」以外の小名集落には神社か寺院（あるいはその両方）があり、宗教・習俗のうえで一つのまとまった集団を形成していることが予想されます。畑は、舌状の台地上（ヤツ田の両側）で、山や野のなかにあります。「林御林」とあるのは、旗本林氏が領有している林です。村境の内側に「内野」（平川村全体で独占的に使用できる野）が、境の外側には他村との入会野（他の村と共有して利用する野）があります。お気づきかもしれませんが、実はこの村絵図は、家・田・畑・林がそれぞれ個別に3色に色分けされています。カラーでなければわかりにくいのですが、赤色が佐倉藩領（堀田様）、青色（緑色になっていますが）が旗本神谷氏の知行所、白色が旗本林氏の知行所に分かれています。平川村は、所領が少なすぎ、支配する百姓がいないために色分けされていない旗本戸塚氏の知行所を含めて4人の領主に支配されていたわけで、複数の領主に分割支配されていることを「相給」と呼びました。この村は正確には4給、絵図では3給の村として描かれています。同じ小名集落のなかでも領主の違う家が並び、田も畑もばらばらに支配されていたことになります。

このように色分けされた絵図が残っているのは明治の初年までですが、土地の利用の仕方などは、少なくとも1970年ころまでは大きく変化していたわけではありません。実は、戦後すぐにアメリカ軍が日本各地の空中写真を撮影しています。この平川村が写っている写真は1947年のものですが、これを見ると少なくとも平川村に関しては、この村絵図とほとんど同じような土地利用です。ところが、1989年解説のゴルフ場によって、とくに台地状（野や山や林）の景観は大きく変わりました。それでも、村絵図と航空写真（アメリカ軍撮影のものと同最近のもの）、地図とを持って歩くと、江戸時代の平川村の姿を想像復元できるようなところがまだ随所にあります。

これから、暖かくなったら、みなさんも近くの「かつての村」を歩いてみませんか。

※参考文献

『絵にみる図でよむ千葉市図誌』（上・下）は、千葉市内を歩くときに最適です。

重いので、必要部分を千葉市内の公立図書館でコピーするとよいかと思います。

次回予告

第133回くらしの植物苑観察会 2010年 4月24日（土）

「江戸の花 桜草」 鳥居 恒夫（植物・園芸研究家）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 入苑無料